下村和子全詩集・解説

人の世の共感で地球に立つ詩人

佐相　憲一

下村和子さんの詩世界の全体を見渡して強く感じることは、人の世の共感性と、地球の詩人だということである。

詩には作者のルーツ滋賀や暮らしてきた西宮や大阪が濃密に反映されている。また、四国の遍路みちや和歌山熊野古道、屋久島、アイルランドやネパールなども反映されている。激しい情念がそれぞれの土地の記憶と結びついて展開されてもいる。

しかし、それらはいわゆる土地スケッチの次元のものではない。詩に刻まれているものはもっと深く、普遍的な命の揺れ動きや、人生哲理などが読みとれるのだ。つまり、下村和子さんの詩は、どこが舞台であれ、常に地球に立っていることを感じさせ、自他共に、常に人の世の個の内面までおりて行って描かれているのだ。

そのように命の本質を見つめる姿勢は、生きることに正面から向き合ってきたことによるのであろう。作者は少女として、娘として、孫として、若者として、学生として、教師として、演劇人として、妻として、母として、ひとりの女性として、ひとりの人間存在として、しっかりと生きてきた。それが深く大きな背景となっている。道のりには困難も多かったが、生きていることにおいて、それらはすべて輝いていたのであり、知的好奇心と生命力と行動意欲と思索性に満ちた作者の道のりはとてもまぶしい。

詩作品や略歴にも見られるように、作者は幼少時より複雑な家族環境に育った。信頼できる肉親の記憶も強くあるが、どちらかと言えば、こどもの頃より存在の不安と孤独に向き合わざるを得なかったと言えるだろう。そこから下村和子さんの詩には、凛とした個の深みからの澄んだ声が聴こえてくるのである。身辺雑記的な排他的な狭さはまったくない。乗り越えて連帯してきた人の独立独歩の精神だからこその愛がすがすがしく優しい。さまざまな土地の土着のものを愛着をもって取材しながら、ベタベタしたものはいっさいなく、一方では自らの人生と関係者の人生の大切な交錯として、他方では地球生命の広大な営みの中の貴重な土地の人間の行為や精神として、読み手のこちら側にも、題材の舞台に限定されない広い共感がひろがってくる。現代詩にありがちなひとりよがりなところはなく、読み手にもすっと自然に入っていけるひろいニュアンスがある。

一九三二年生まれの日本の女性詩人がこの自立した精神で、日本の伝統もしっかりと表しながら、地球のスケールで人間のありようを見つめていることは、間違いなく先駆的なものを含んでいる。その開明的な特長にはおそらく、若い頃に世界文学を演劇で体験したことや、英語を専門として学んだり教えたりしたことや、海外でも自分の足と目で感じてきた経験なども影響しているのだろう。

詩を二篇引用しよう。

冬の樹

枝葉を落しきって裸身になった樹が　逆さに立てた
骨の形になって　それでも真直ぐに背筋を伸ばして
　広い公園に整列している　歩いている人は殆どい
ない　自分の足音を自分で聞きながら歩いている
容赦ない風が正面からやってくるが　削るもののも
うない樹は平然としている

ここ迄のきびしさを自分に課してきただろうか　ぬ
るい私はコートにくるまって背中を丸めている　あ
そこ迄殺いでも生きていけるのだ　冬の樹はもうカ
ミの形になって空と対話している

（詩集『弱さという特性』より）

ふるさとのない女

わし　これでええけえ
後悔しとらんけえ

死ぬ時さあ
あの人は笑っとったけえ
わしもこわくない

お母あが教えてくれた
――良いことをすれば良い報いがある
わしその通りにしたけえ
四国ははあ　へんろのくにじゃ
ほいでもよお
あの女が溶けかけた手差し出した時
わし　やっぱり身ぶるいした

乞食へんどってな
あの人たちは一生歩きつづけなさる
人にきらわれる病気をもった人はなあ
わしもとうとう同じへんどになってしもた
乞われれば宿を貸すのがお四国じゃ
病人ちゅうて断りはできなんだ

わしこれでええけえ

後悔しとらんけえ
死ぬ時さあ
あの人は手合して笑とったけえ
わしもこれでええ

波音が一日中
たえまのう聞えよるでえ
お大師さまと同行二人じゃけえ
まだ歩けるけえ
まだ歩けるけえ

（詩集『海の夜』より）

「冬の樹」に学ぶ厳しい内省に心うたれる。厳しくはあるが、不思議なひろがりの優しさをもっているのは、生き方を見つめる積極的な希望と願いがあるからだろう。虚飾なしにあるがままの裸の心で命の存在感から出発すること。生きることは常にその繰り返しかもしれない。作者の詩想は外に大きく開きながら、内側を深めている。先述した独立精神ゆえの優しい愛が共感を呼ぶ。

そのような精神だからこそ、「ふるさとのない女」が書けるのだろう。最も過酷な立場にいる寄る辺ない弱者。この詩はそうしたお遍路さんの一女性の声をリアルに伝えている。と同時に、作者自身がこの女性の心に同一化しているところがあると思う。存在の不安感と痛切な対話は深淵を見た者だからこそよく分かるのであり、この一篇の名詩を書く背景には作者自身のさまざまな人生体験が生きているだろう。だから、読者も自らの人生の思いにここに語られた言葉を引きよせて読むことができるのだ。

作品「冬の樹」は二〇〇七年の第九詩集『弱さという特性』からであり、作品「ふるさとのない女」は一九八四年の第一詩集『海の夜』からである。並べて読むと深いところでつながっていて、下村和子さんの詩世界の特長がいっそうよく分かる。それは、共感の響きである。樹木に学び、お遍路さんに学び、自ら樹木になり、自らお遍路さんになり、かなしみは願いと共感へ昇華されるのである。

〈藍〉という作者の詩世界のキーワードも共感の象徴の一つであろう。次に引用する一篇はその原点を表している。二〇〇八年の第十詩集『手妻』収録の作品だ。

藍の魔性

藍は
色になって染まった後も
まだ生きていて　変化する
着る人の心に添って
色を成長させる

母の遺した着物は
母から私へ　持主を移し
少しずつ　赤みが消えて
私の好みの通り
青を深めている

日々鮮やかな瑠璃色は
五十年経っても褪せることはない

心がさむい日
私はこの衣を身に纏う
絹は母の肌合いを残して
あたたかい

藍は　人と同じ生きものえ
ほやから　人の思いも察するのやなあ
しおらしい気持で　着てあげたら
藍も　安心して　青を輝かせるのやわ

祖母が語ってくれたのを思い出す
藍着はいつ取り出しても静かだが
月の冴えた夜
月光を全身に受けて　座っていると
袖が　小さく踊るのを
感じることがある

（詩集『手妻』より）

幼くして亡くした母、そして自死した祖母。しかし、記憶のぬくもりが藍着に生きている。命のふるえの奥のところから切実に書かれたこの詩には、大切に個人的でありながら、すぐれて普遍的な人の心が感じられる。この詩を翻訳したなら、おそらく世界各国の庶民が共感するだろう。日本の滋賀の里が地球の人の世につながっているのである。

人から人へのこの原点的な親愛の共感性が、世界平和の人類的なものにまでひろがっていくのも見逃せない特長である。下村和子さんの詩が地球に立っていることをよく示す〈藍〉関係の長詩を次に引用する。

瑠璃浄海

1

青過ぎる青
美を越えた凄絶な青
海も　桜のように
呑み込んだ人体を滋養にするのだろうか

激しく崖にぶち当って白になり
花になり　渦になり
深みへ　深みへ
鎮魂の藍建てに励む海
追い詰められて
この海に投身した日本人は数千人

サイパン島・バンザイ絶壁（クリフ）に立つと
光る沖に
たどりつけると思える距離に
ふるさとが浮かび上がってくる

平和ぼけした放浪者がひとり
誘う青を振り切って
陽気な観光バスの方に走っていく
暑い二月の午後

2

深藍（ふかあい）の海に向かって立つ観音さまは
うっすら汚れて灰色だ

北マリアナ連邦　韓国　アメリカ　日本
サイパンの海に消えた兵士の
国の数だけ
それぞれの文化の形で
青を視詰める仏たち

水は
呑みこんだ生命（いのち）を染め直そうと
波の塩を媒染剤にして
ひとときも休まず藍を建てつづける
風も参加して
豪快にしごと唄を歌う

五十余年
その営みを見守ってきた大小の石像は
母の手のように輝（ひび）われ
黒ずんでいる

3

あの藍は
死んでいったものたちからの遺言だ

惨劇に消えた人の
病いに屈した人の
生命（いのち）と引替に残していったもの
未来は決して暗いものではない
本来　この世は平和で清澄なところだ　と
希望を捨ててはならない　と

懸命な死者たちの声は
車や飛行機の騒音にかき消されて
政治の館にも町の暮らしにも届かない
それでも水中の森は
せめて一人の胸に響くことができれば　と
痛苦に堪えて
色出しの仕事に励んでいる
眠りすらも断って

この願いと祈りの絶唱。「瑠璃浄海」に戦争の死者たちを刻印し、寄り添い、歴史のいまに未来へと願って生きるこの声。そこに〈藍〉の人間的な共感性があり、地球自然界の共感性がある。

下村和子さんは、日頃直接の言葉で戦争と平和のテーマを書き連ねる詩人ではない。しかし、この作品にも顕著なように、自らのスタンスで社会問題に意識の高い人である。それがまた新鮮で、大きな魅力となっている。

もともと下村和子さんは、故・井上俊夫さんや故・福中都生子さんや故・犬塚昭夫さんらと詩誌「大阪」の同人であった。その後所属した故・島田陽子さんらとの「叢生」や「地球」誌、寄稿してきた「コールサック」や「詩と思想」、主宰してきた文芸誌「原石」などを下村和子さんの詩歴でつなげて見渡した時、人間の内面性を大事にしながらも、社会・世界に目を向けてきた人物像が浮かびあがってくるだろう。

（詩集『縄文の森へ』より）

私は大阪時代の二〇〇六年に「九条の会詩人の輪」の関西のつどいを企画しよびかけて広範な皆さんと開催したのだが、その時、真っ先に実行委員になっていただこうと声をかけさせていただいた中の一人が下村和子さんだった。当日、下村さんのリードで私たちは、原爆ヒロシマの峠三吉の名詩「序」（〈にんげんをかえせ〉の詩）を群読したりして、会場中が勇気づけられた。演劇で鍛えられただけあって、下村和子さんは朗読のプロである。私は日頃尊敬し信頼しているこの女性抒情詩人のそんな姿にも感銘を受けたものだ。日本の現代詩には、詩人は世にアピールしたりすべきではないなどという、世界では信じられないような狭い見方が根強くあって閉鎖的だが、そうではない下村和子さんは確かに地球に立つ詩人である。

さて、「瑠璃浄海」に戻るが、作者にとってもこれは思い入れが強いようで、一九九九年刊のこの第六詩集『縄文の森』の後、二〇一一年の第十一詩集『いろはにほへど…』にも同じタイトルの詩「瑠璃浄海」を新たに書き、こちらの方は三・一一東日本大震災と福島原発事故をも見つめた作品となっている。

〈藍〉のほかにも、下村和子さんの詩世界にはいくつかの重要なキーワードがある。この全詩集を読むと、それらのテーマがさまざまな形で書かれていて、繰り返されながらそれぞれ別の趣でひろく深められていることが分かる。

順不同で思い出すままに挙げてみても〈海〉〈風〉〈樹〉〈森〉〈鳥〉〈色彩〉〈お遍路〉〈古道〉〈祭〉〈女と男〉〈幼少時の記憶〉〈祖母〉〈家族〉〈祈り〉〈地球環境〉〈平和〉など、幅広い。そして、それらが別個の詩世界ではなく、根っこのところですべてつながっているから、この全詩集一冊がひとつの大きな詩世界を展開しているとも言えよう。

その中で今回あらためて全体像を読み返してみて、強い印象で受け取った発見があった。〈鳥〉の詩群である。「鳥になる」は一九八七年第二詩集『鳥になる』のタイトルにもなっているし、「鳥よ」にいたっては一九九六年第五詩集『泳ぐ月』の「鳥よ！」を

はじめ、二〇〇四年第八詩集『風の声』の「鳥よ」、二〇一一年第十一詩集『いろはにほへど…』の「鳥よ」及び「鳥よⅡ」と、違うバージョンで熱心に追究されている。ほかにも、最初期から今日にいたるまで、さまざまな鳥が詩の中に登場している。

下村和子さんの描く〈鳥〉は、花鳥風月文化の人間の慰みもののような鳥ではない。もっと本質的な、地球生物界の哲理を体現するような存在である。遠く不思議な生きものであるが、その観察が逆に作者や読者の人生を考えさせて、不思議な共感が醸し出されるのである。そこには鳥への敬意や憧憬すら感じられて、二十一世紀に光る。

「鳥よ」の変遷を読むと、共通の語り口でありながら、孤愁と励まし、寂しさと自立的生、のあらわれ方に微妙なニュアンスの違いが出ていて、興味深い。全詩集ならではの味わい方ができるわけだが、一人の精神がたどってきた揺れ動きのありようが親しみ深く感じられ、複雑なニュアンスそのものに共感する。

強く生きたいという希望と、寂しく弱いものをありのままに受けとめたいという潤い、どちらも大切なことだ。言葉を変えると、下村和子さんの詩には、批評性と抒情性がしっかりと共存し、溶け合っているのだ。

鳥　よ

彼の目に　空は何色に見えているのだろう　異様に
広がった鈍(にび)色の空と水　見たこともない雲の形　青
を失った海　仲間から外れたのだろうか　一羽の鳥
が不確かな飛行で旋回を繰り返しながら　飛んでい
く

あの青はどこへ行ったんだろう
あんなに　きれいな海なのに
青の消えた海
どっちへ行けばいいんだ
方向が分らない

赤い屋根のとがったあの家もない
立ち上がる大きな波が珍しくて
あの波の色が不思議で

あんな色初めてだから
長老の声が逃げろって言ってた気がする
海が裂ける！
そう思って　僕は見たくて
海の底が見えたんだ　本当に見えたんだ

みんな逃げてしまったらしい　相棒もリーダーもい
ないはぐれ鳥　鳥であるからには飛ぶしかないのだ
よ　お前はいいよ　飛べるのだから　空は自由だ

右を見ても　左を見ても
同じ景色がどこ迄もどこ迄も続いている
何故なのだろう
いつも見ていた樹がない

鳥よ　飛べ！
嘴を鋭角にして飛べ！
お前は飛べるのだから
信じて　行け！　信じるのだ　自分を
空は神の庭

私もまだ生きている
此処から　見ていてあげる
前進を続けても
力尽きて　諦めても
ひとりは　ひとりなのだ
鳥よ！　勇気を出して行け
お前は　飛べるのだから

（詩集『いろはにほへど…』より）

〈鳥〉に思いを託すのは、寄る辺ない生を生き抜き、地球的視点で感じてきた下村和子さんの詩と人格にとって象徴的と言えるだろう。それが素直に表現できたのは、苦難の多かった実人生で最愛の夫とこどもに恵まれ、愛の交感を深く知ったことによるだろう。

老いは寂しいものだが、寂しくてもなお、寂しさのただ中で、生きる励ましと願いを持ち続けられること、そこにも私は感銘を覚える。

全詩集の冒頭に収録されている初期の詩「陸へ上がれない」はさまよいながら生き続ける自らの半生の自

伝的なニュアンスを含むが、日々の人生の海原で過去から現在へと内省を深めることで、きっとそこから作者は〈共感〉の大地に上がったのだ。そして、回る地球自然界の生命の空へと想像力の翼で飛んできたのである。

この全詩集のいたるところからにじみ出る、本当の優しさ。さまざまな人物が出てくるが、伝統工芸の人々も、作者の血縁地縁交友関係の人々も、取材して刻印した各地・各界の人々も、そして大切な作者自身も、姿・様子だけではない〈心〉が描かれている。血のかよった、ふくらみのある詩世界だ。

最後に二篇、引用しよう。共に〈愛の詩〉と呼んでいいだろう。

生　む

淋しい日があったから
歓喜の時が来た
登攀がきつかったから
あなたに会えた

七千年余を生きる縄文杉の
静かな湿りに私の身体は濡れていた
屋久島に渡り
四つ脚になってたどりついた

嬉しい　と思った時
女は妊む
愛された　と思った時　私は妊んだ
両手両脚をひろげて
私は立った
深い森の中に
一筋射し込んだ陽光が眩しかった

娘と私
生む女がふたり
枕を並べている
子供の未来に夢を見る娘

第一幕の幕を引いて
新しいわたしを描こうと
第二幕を開けるために
自分生みの独り土俵で
四股を踏んでいる私

（詩集『縄文の森へ』より）

弱さという特性

女は
ほとけを自分の腹に宿す
十月十日かけて彫りあげた
初顔のやわらかさ

無垢で柔軟
弱さの極という形で
赤ん坊は女に　愛を教える

弱者が強者を導くとき
海はゆったりと満ちてきて
地球に光の朝がひろがる

仏は本来何の力も持たない
その弱さの故にやさしく　不動である
仏像に銃を向けると
微笑したまま　倒れて　こわれる

（詩集『弱さという特性』より）

この詩「弱さという特性」を同名詩集が出た二〇〇七年に読んだ時の深い共感をいまでも覚えている。私はそれを詩誌「柵」の書評欄で強調し、私の詩論集にも再録したのだが、あえていま、もう一度この詩を広範な読者諸氏におすすめしたい。

女と男が裸で愛しあって宿した新生命は〈ほとけ〉なのである。そのまぶしいおののきは、時代の最新兵器どころか銃の一発でも消えてしまう。限りなくやわらかく優しい〈赤ん坊〉という人間存在の始まり。その〈弱さ〉そのものの大切さを、戦争的なもの、暴力的なものへの最も鋭いアンチテーゼとして強調するこ

の説得力ある新しい価値観。強いものこそが生き残るという商業主義の世の中で、依然として軍事力を賛美する一部の権力ある人々、そうしたものに、限りなく優しい愛の詩が対峙している。とびきりの反戦詩・非戦詩とは、こういうものを言うのではなかろうか。

作者は生命誕生の原点から世界を感じとっている。殺伐とした弱肉強食のこの社会において、この詩世界が伝えるものはますます大切になっていると言えよう。深い詩的認識は二十一世紀のこれから、ますます光るであろう。

詩人・下村和子さんは二〇一二年のいまも歩き続けている。最近では各地の祭の心を独自の目で観察し考察する連載エッセイなどを書いている。この全詩集に出てくるさまざまなものを経て、深められた人生の言葉は味わい深い。

この貴重な本が、人を愛し、詩を愛する人々に、ひろく読まれることを願っている。

藍染の青の精神を生きて
後世に語り継ぐ人

『下村和子全詩集』に寄せて

鈴木 比佐雄

1

下村和子さんの多くの詩篇は、人間が自然の一部であり、自然に生かされながら、伝統文化の中にあるエコロジー的な知恵と精神性を再認識させてくれる。初期の詩篇から変わらないこの環境問題を掬い上げようとする精神性は、年を経ても変わらずに、そんな自然思想が更に深く詩に宿り始めている思いがする。全詩集を通読すれば、下村さんが藍染を通して一貫してエコロジーを考え実践してきた詩人であることが明らかになるだろう。3・11の原発事故の教訓をいかに謙虚に受け止めるかは、自然の本質や知恵をいかに学ぶかにかかっていて、そのためにも下村さんの詩篇は、今の時代に読まれるに相応しい詩篇だと私は考えている。

下村和子さんから全詩集の相談を受けたのは、二〇〇七年の五月頃だった。親友だった亡き福田万里子さんの全詩集の何回目かの打ち合わせに同行してくれ、枚方市にあったご主人の福田正人宅を一緒に訪ねた後だったと思う。私たちは『福田万里子全詩集』（二〇〇八年十一月刊）の編集方針が決まりほっとした気持ちでお茶を飲んでいた。すると下村さんが「私も全詩集をまとめようと考えている」と言われたのだった。下村さんはご主人を亡くされているので、自分のことは自分でまとめておきたいとはっきりと意思を語られたのだった。私はその思いを尊重したい気持ちもあったが、それよりも違うことを提案してしまった。私は「下村さんの詩集を今まで読んできて、藍染のことが必ず書かれている詩があるので、全詩集の前にその集大成のような藍染をテーマにした詩集をまとめられた方がいいのではないですか」と正直な気持ちを伝えたのだった。下村さんは少し驚かれたようだったが、もう一度考えてみると語られた。それから何日か経って電話があって、全詩集は後にし、藍染についての詩集をまとめたいとの連絡があった。そして藍染にまつわる第十詩集『手妻』が二〇〇八年の晩秋に生まれたのだった。そして二〇一一年には東日本大震災

を踏まえながらも藍染の青をさらに内面化した第十一詩集『いろはにほへど…』を刊行した。その後下村さんは全詩集をまとめる決意をされて、私にその編集作業を託してくれたのだった。

私はすでに詩集『手妻』の解説文「無限の前で藍を生きる人」で下村さんの第一詩集からそれまで刊行された詩集のことを論じさせてもらっている。その内容を再録しながら、さらに詩集『いろはにほへど…』などを含めて論じていきたい。

2

人はなぜ自然の色彩に魅せられて感動するのだろうか。私で言えば、朝日が昇る直前のシトリン（黄水晶）の夜明けの色だ。一日が始まるほんの少しの時間だが、宮沢賢治の詩にも出てくる色彩を、奇跡のように眺めていることがある。また夕焼けが闇夜に向かっていく時の赤紫が藍色や紺色などへ刻々と変化する色彩もまた、この世の奇跡のように心を掻き乱す感動を与えてくれる。自然の色彩に人は人の世を超えた根源的な力を感じ取るのだろう。詩人の中でも色彩感覚に敏感な詩人がいる。下村さんもそんな詩人の一人だが、その藍色に寄せる想いは尋常ではないものを感じていた。

下村さんは詩誌「コールサック」に一九九四年から欠かさず寄稿してくれている。丁度、同じ大阪に在住していて岩絵具で日本画を描いていた福田万里子さんが寄稿された翌年ごろで、福田さんと下村さんといった関西の女性詩人は、古代からの色彩を無意識に背負い今も生活に生かそうとしているのだとも感じていた。そんな出会いから私は下村さんの詩を長年読み続けてきた。下村さんは現代人が便利な生活の中で忘れ去ろうとするものを一貫して見続けてきた。自然の中で生かされているという古来からの自然観や人生観を当たり前のように実践している詩人である。エコロジーという言葉が生まれる以前からエコロジーを生きていた詩人だった。

下村さんは今まで十一冊の詩集とアンソロジー一冊を出している。またエッセイ集三冊と朗読CDも二枚出している。一九八四年に刊行した第一詩集『海の夜』には、「織る」という詩があり、どこか無言劇を

見ているような気がする。そして女と男の人生をかけた修羅場が彷彿としてくるだけでなく、その中にも静謐な安らぎのようなものも感じられるのだ。

織　る

男と争って
負けた女は
言葉を捨てた
捨てた言葉を拾い
両手で握りつぶした女は
手首に力をこめて
糸を紡いだ

カタン　コトン
カタン　コトン

織機の前で
女は色彩を追っていく
青　黄　紫　黒

色は女のいのちにじゃれつく
回ってからんで
重なり合って

カタン　コトン
カタン　コトン

女は
男のことはもう忘れて
自分自身を織りあげる
その布で自分を飾る
男が退屈して
それを見ている

下村さんはこの第一詩集を五十歳代になって刊行している。詩は四十歳代になってからで、それまでは神戸市外語大学英米学科に在籍していた頃より演劇活動に情熱を持っていた。劇団制作座に入団し、モリエールの劇などで女優としてデビューした。卒業後は英語の教師をしながら、夜は劇団を続けた。ドストエフス

キーの『罪と罰』の主人公のドーニャ役で出演もした。二十歳代は女優の外に戯曲を書いたり、舞台芸術にのめり込んでいたようだ。三十歳代は子育てと映画シナリオを書こうとしていた。そのような経験を踏まえて、下村さんは最終的に詩が最も自分に相応しい表現方法であると理解したのだろう。

下村さんにとって第一詩集当時は、言葉に「織る」という行為の持つ言葉を超えた重さを宿そうと試みていたのかも知れない。戯曲の言葉は女優の肉体を通してリアリティを獲得させる試みだが、その意味では戯曲的に書かれた詩集であったかもしれない。

3

一九八七年に刊行した第二詩集『鳥になる』の冒頭に詩「藍」があるが、この詩こそがその後の下村さんの詩作の豊かな源泉になったと思われる。

藍

藍のいのちは
人の一生に比べられる
若い藍で建てた濃紺の着物を着て
胸高に帯を締めると
日本の祭礼をとりもどしたような気がする

藍は機嫌を損ねやすい
藍汁の中に手を入れていると
心の揺れが伝わってくるという
染色家は
（知恵で建て愛情で育てる）と微笑した

大事に守られた
熟年期の藍で染めた淡色は
日の光を吸いこんで
これは明度を増した完成の色
能衣裳にも使われるとか

燃焼しつくした老液は
藻海のように動かず
その中に布を漬けると
白布は白のまま残り
藍はゆっくと呼吸を停止している
瓶から出された骸は
しずかに土に戻される
藍は肥料となって
来年のための蓼草を育てる

＊

夕刻を告げる鐘が
東と西から響き合う滋賀の里の
庭に干した藍布が
空一杯の茜色の下で
はためいていた

下村さんの藍布には、故郷の滋賀の里で子供の頃に見かけた情景が想起され、その製作過程の細部が織りこまれている。藍とともに生きた人びとが立ち上ってくるのだろう。藍染の母胎となる蓼草から奇跡のように藍が生まれるリズムが、詩行に乗り移っているのだ。人の一生にも喩えながら藍汁の生成から自然に戻る過程が、この詩篇に刻まれている。下村さんの視線は、藍を鑑賞・消費するのでない製作する職人たちの目線なのだ。そしてその藍は蓼草と人の力の融合によって生まれた尊いものであり、その過程を畏敬する心が下村さんの詩篇に滲み込んでいる。これほど藍染に思いを込めて書かれた詩篇は、神戸の鈴木獏さんの藍などの染物詩篇以外には私は知らない。この詩「藍」の後には「刈安」の黄色を描いた「下染めの色」が続き、その後の三篇目に詩「滋賀の雪」が配列されている。

滋賀の雪

目覚めると
雪だった
――一緒に死んだげる
四十年前に言った言葉が
いまもこの古い座敷にのこっている
色の溶けかけた金箔の屏風にかこまれて
母屋の木魚をききながら
朝の怠惰をたのしんでいる

父が不在地主で
先祖伝来の田地をみんな無くした時
祖母は毎夜その罪を仏壇に詫びていた
視力を失っても
祖母は治療をいやがった
――これでええのえ
私と並んでねながら
子守唄のようにくりかえしていた

ひとりで死んでしまった祖母は
今も懺悔の布を織っているのだろうか
雪が近付くと
蔵に片付けた古い織機が
小さな音をたてるのだ
私が幾度か見た夢の中には
裏前栽からじっと屋敷を見守る
小さな白蛇がいた

今日の夜には
祖母が織った布が
若松につもった雪の上に
置かれているかもしれない

この詩を読むと、下村さんが子供の頃に極限の体験をしたことが分かる。農地解放で先祖伝来の土地を手放し目も見えなくなった祖母は、死にたいと絶望的になっていた。実母が幼少の頃に亡くなり、母親代わりであった祖母の思いを察して、「一緒に死んだげる」と言った子供の心に生涯、祖母の悲しみは刻まれているのだろう。そんな祖母であったが、すべてを無くした後でも、藍布を織り、その藍染の着物を愛する生き方は、下村さんに決定的な影響を与えたのだ。絶望の中でも決して暮らしの中での美意識を失わない凛とした存在感が、子供の頃の下村さんに引き継がれていったのだと思われる。蔵の中の織機が祖母の魂で動き出し藍布を織り始め、その藍布が夜明けの雪の上に置かれている様は、幻想的で壮絶な美しさを生み出している。

4

一九九一年に出した第三詩集『鄙道』の三番目の詩に「甕覗き」という詩篇がある。この詩篇は祖母と父との関わりを藍染めを通して語っている。

甕覗(かめのぞ)き

病院の白い布団の上に
祖母の染めた藍衣をひろげた
　甕覗きのような男で終ってほしい
　祖母が父に抱いた願いだった
藍の最晩年の色といわれるこの色は
静かな淡色だ
いくつもの藍甕が並んでいても
最後まで格調を落とさず
この秘色を出す藍は少ない

若くして夫を亡くした女は
夭折する藍も多く見てきた
藍の寿命もさまざまだ
やっと育てた淡藍で祖母は絹布を染め
息子の寸法に着物を縫って遺した

染め終った後の藍は
糸ほどの足跡も見せず
何を漬けても無色になって果てる
とんでいく鳥のように

死ぬ前の父は無言だった
身体中に転移した癌を抱えて
真直ぐに横たわっていた
痛みも訴えず
目だけはいつも窓の方に向けていた
とび続けるものの羽搏きを聞いていたのだろう

死の前の病床で
甕覗き一色の着物は
力の限り藍の青と意志を主張していた

藍色にも、いろいろな色合いがある。その中でも甕覗きという淡藍に祖母がこだわり、息子である父のた

めに織り上げていた藍衣を病室で身に着けようとする場面は、言い知れぬ感動を呼び起こす。母から生まれた子は、最期の時に母の手作りの藍衣で死への旅たちをするというあたかも演劇空間のような場面がこの詩を支えているように思われる。下村さんにとって藍染の衣を語ることは、祖母と父の生き方を語ることであり、さらにその藍にこだわる生き方に秘められた、つつましい暮らしの美学を語ることなのだろう。人口染料に満ちたコスト優先の暮らしから、かつて存在していた藍とともに生きる暮らしを一度見つめなおす視線が下村さんの詩にはある。蓼草が生い茂る野原を眺め、そんな「鄙道」を歩くことの憧れを記したのがこの詩集だった。祖母や父のことを語りながら、実は自分の暮らしの実践的なあるべき姿を探っていたのだろうと思われる。

5

第四詩集『耳石』の「藍青」では、海の底を藍甕にみたてて、海の青は多くの命の再生であることを語り、「私を焼いたら／骨の粉は紺屋に運んでほしい／私を染めこんだ藍の着物は／娘に遺す贈物／全くの孤独は無いと知らせたい」と記している。藍甕という海の中に散骨し、藍の着物になって再生したいと願っている。この詩集では自然といかに共生し、どうしたら地球の破壊を押しとどめることが出来るかを故郷の近江の風土を見詰めながら詩作している。

第五詩集『泳ぐ月』の「淡海の月」では、故郷の琵琶湖の月の光を次のように探しにいく。「夜も明るい街を抜けて／月を探しに電車に乗った／淡海は大きな闇の水鏡／山に守られて無絃の琵琶を奏でる湖／内湖遺跡からは木製絃楽器も発掘された／祖母も父も仰いで育った蒼い光を探す旅」をして、下村さんは藍染を残すには、藍染を畏敬する自然な暮らしの心を取り戻すことが必要であると考えた。「蒼い月の光」を感じて、そこに藍と呼応し合う自然の色彩感覚を見出す旅をさりげなく記している。最もシンプルな暮らしとは、自然の一回限りの色彩を瞬時に発見する旅でもあるかのように物語っている。

第六詩集『縄文の森』の「寂」では、縄文の森の中の数千年時間へと私たちを誘う。「倒木が／そのままの形で朽ちている／そんな森は静かで青い／／緑を茂らせる巨樹の間に／何百本もの消えていった樹が／ひしめき合っていて暗い／／孫に場所と光を譲って／穏やかに時間を燃焼し／密なる空間になっていったものたちの気配／／七千年という時間は計れないが……／私の過去　私の未来が／じわっと感じられてくる」。下村さんは生きている巨樹よりも、縄文杉の倒木のある森のたたずまいに、言い知れぬ命の継承を感じ、「そんな森は静かで青い」という。倒木に青い光を感じている。それはきっと海の色や月の光に感じたと同じ藍色に類似した色合いだったであろう。自然の色彩を感じることができるには、海や月や森の気の遠くなる時間を感じることが必要であることを語っている。自然の色彩の奥に込められている時間を現代人たちは、残念なことだが忘れ去っている。

第七詩集『隠国青風』と第八詩集『風の声』にも自然の色彩から下村さんは永遠の時間を感じてそれを記そうとしている。

第九詩集『弱さの特性』の「蒼い時間」には弱さというものの持つ強さが書かれているが、それを読み取るためには、森羅万象から与えられる光に永遠の時間ともいえる「蒼い時間」が溢れ出てくるまで見詰めなくてはならないのだろう。

蒼い時間

夜の仮死から覚めて昼の暮らしを始める前の静かな
時間が好きだ　少しずつ明るくなって青を取り戻し
ていく空を眺めている　空と海との境界線が見えて
くる
　海のなかに母がある*
と言った詩人が居た　遥か彼方に別れて在る母との
対話を楽しむ　青は遠い色　近付くと消える色　あ
れ程の深い藍の水も手にとれば　無い色になって掌
の見馴れた筋を浮きたたせるばかり　だから私は母
の身体はもう探さない　魂だけを呼ぶ

重ねてきた罪の一つ一つを話せるのは母　弱いもの
が生きていくためには罪も犯した　一番大事な空や
水も汚した　そしてゴヤの黒い絵　あの餓鬼はわた

し　あなたからいただいた私の中を流れる水も粘っていくのが辛い

海の動きを眺めていると私も水の循環の輪に加わって浄められていくようで嬉しい　海に光の道があらわれる　あれは私にとっての透明な祭壇　肉体の弱さは心の弱さではない　あの青のように……
二度とは現れない今朝の空　今の海を視詰めている

＊三好達治

下村さんは七歳の頃に実母を亡くしたので、母との会話はほとんど覚えてはいないだろう。「青を取り戻していく空を眺めている」と母を思い出して、果たすことができなかった母との対話をいつのまにかしているのだろう。それはきっと母との魂の交流の時間であるのだろう。下村さんは人の心に住まう弱さを見つけて、ゴヤの絵の中に出てくる子供を泣きながら食べている「餓鬼はわたし」ではないかと思い始める。人がこの世に生きることは、他の生きもの犠牲と恩恵によって、生かされていることを痛切に感じているのだ。空や海の青さを白紙の心で受け止めることによって、人は弱さを自覚して、逆に強くなれることを語ろうとしている。

6

第十詩集『手妻』には二十五篇の詩が収録されている。この二十五篇には、第八詩集までの藍について書かれた詩篇を新たに書き直したものも入っているが、新しく書いたものが大半を占めている。下村さんが誰よりもこだわり続けてきた藍を生きる暮らしを集約した詩集だ。下村さんの根源的なテーマを直視し、妥協することなく一冊の詩集に集大成したものだ。戦争中であっても父と茶道の宗匠とが茶を通して、「サイレンの鳴らない間」の静かな時間を過ごしていたのを書き記した詩「手妻」は、忘れがたい存在感を与えてくれる。

手　妻

三月の雨は　音を消して下りてくる
花咲く前の街に　しっとりと降る
屋根を濡らし　道を落着かせる
そんな日は　外出するのも億劫で
私は　独り茶会をする
免状を持たない　私のお茶は融通無碍

月の下で見れば
欠け茶碗も名器です
サイレンが鳴らない間は
私たちの時間ですからね
戦争が激しくなった頃
焼けだされた茶道の宗匠一家に
我が家の座敷一間を　お貸ししていたことがあった
子供だった私は　側に座って
師匠と父の静かなお点前を見ていた

電灯を弱めた　影の部屋で見る
男二人の黒い背中が　ずいぶん大きかった
縁側に敷いた赤い毛氈の辺りから
茶筅を動かす音だけが聞こえてきた
お茶は音でたてるのだと　独り　学んだ
悠然と茶を啜る父たちの姿は
私の理想になった

（「手妻」の前半部分）

下村さんは、戦時中に父と茶道の宗匠の二人の男たちが無言で茶を点て、茶を啜る場面と音の光景を心に刻み、生涯反復していくのではないか。国家の危急存亡の時にも悠然と茶を啜る行為が「私の理想となった」という。手妻とは、手が稲妻の如しというように手先のしなやかなことをいい、江戸時代の「胡蝶の舞」のように紙の蝶を扇子で飛ばす手品のことだ。父たちの手さばきが下村さんにとって手品のようであったのだろう。またそれは心の奥深くにある美しいものに通じ、その扉を開く心の稲妻のような働きをして、下村さんを励まし続けた幸福な思い出になったのだろう。詩「手妻」の後半で江戸庶民の美意識や遊び心に下村さんは抵抗精神を感じ取っている。

制限の中で　咲かせる華は甘い
江戸の庶民も　なかなかの知恵者だった
税の取り立てがきびしく
奢侈禁止令の出た町では
茶の湯も禁じられ
着るものは　木綿とされた

藍は絹と同じように　木綿にも馴染み
鮮やかな青を創り出した
藍と白のくっきりとした二色の世界は無限に拡がり
町人たちの遊び心は　江戸の粋を生んだ
高価な茶釜を染め込んだ夜具にくるまって
夢の中の大茶会と洒落た
隠し文字が流行し　恋しい人の名も
こっそり染め入れた
贔屓の役者の名を一文字
絵柄の中に　もぐり込ませるのも一興
　一本の横縞と六本の縦縞
　合わせれば　市村羽左衛門
謎が解ければ　洒落者と

秘かに通振りを競った
青と白で表現される世界は　自由自在
たくましく生きる庶民を
藍は後押しした

きっぱりと残した白の海で
藍は　奔放に
お喋りしている

下村さんの藍の世界は、生まれ育った近江の蓼草から発し、祖母や父の暮らしに敬意を抱き自分の暮らしに生かしている。そんな藍染を突き詰めることによって、私たちに先住民のアイヌや沖縄での藍染や、千年も前に菅原道真筆の和紙にも染められた日本人の基底にある藍を使った暮らしを浮き彫りにしている。またネパールなど世界にもある藍染の文化の所在も明らかにしている。そして下村さんはその豊かな藍染の文化がこれからのエネルギーをむやみに消費しない文化へと移行している未来の世界で重要な役割を果たすので

はないかと考えている。
　詩集『手妻』ほど徹底して藍染について書いた詩集は、今まで無かったであろう。藍染を愛し、もっと藍に近付きたい方にはぜひ読んでもらいたい。また環境問題や自然の色彩に関心のある方の心にも、この詩集はきっと「手品」のように光り輝くだろう。

7

　第十一詩集『いろはにほへど…』は、東日本大震災によって海や空から藍染のような多様な青が消えてしまった自然の恐ろしさに翻弄された人間の悲しみを伝えている。それゆえに人間は本来の自然な青の世界を感受して海や空や大地から、もう一度学ばなければならないことを問いかけているように思われた。詩「青を着る」を引用する。

青を着る

秋の夜は藍
刺し子の袢纏が暖かい

一針一針　希いを縫いこんだ祖母の想い
明治の女が針仕事をした
明るい陽の差す座敷は
洋風リビングに変ってしまったが
白木綿糸の潔さに励まされて
私が初めて袖に手を通した日
ほっこり重い濃紺の布から
ふっとただよった藍の匂いを
私は忘れない
祖母から父　母　私へと
つながる血の系譜
みんな逝ってしまって
残るのは　この藍そして香り

紺を着た日本の女の
毅然とした佇まい
きりりとした手の動き
子供心にも　晴れやかだった
なつかしさにもう一枚
先染の絹糸で織った

瑠璃色無地の着物を拡げてみる
色白の若い肌にも
年齢(とし)を重ねた女にも
それぞれに馴染むのが藍着

人と同じように
藍も歴史を背負って
若い藍は赤みの色
一年毎に青みを増して
色を深めていくのは
植物のいたわりだろうか
去っていった　いとしい人達に代って
私に行く道を見せてくれる
　　これからが本当の人生よ
清(せい)と魔の笑みを見せて
静かに私を視ている藍
匂いがけ　という言葉を聞いたことがあるが
私もこの青を
未来に引継いでいかなければ……

下村さんにとって藍染の着物を着ることは、「匂いがけ」という藍染の匂いを感じることであり、祖母から父母を通して繋がる血の系譜を身体に呼び戻すことなのだろう。藍の色は年々「色を深めていく」という。人間と同じように藍にも歴史があることを体感している。下村さんは「私もこの青を／未来に引継いでいかなければ……」と語り、身近な衣装を通して自然への感受性を深めていくことを伝えてくれている。

また十一冊の詩集には収録されていない詩も四十八篇も収録されていて興味深い。さらにエッセイ集『神はお急ぎにならない―天才たちの楽園を旅する』、『森を探しに』、『遊びへんろ』などの十二編のエッセイも収録されていて、下村さんが旅をしながらそこで生きた人びとの歴史や文化を考える人であることが分かる。故郷の藍染の里を突き詰めることによって、世界の多様な場所の人間の営みに思いを馳せる詩人であることが理解できる。きっと藍染の青を探す旅は巡礼の旅でもあり、また芭蕉のように終ることはない詩を探す旅とも感じられた。多くの環境問題を自分の生き方の問題だと考える人びとに読んで欲しいと願っている。